



どんぐり

No.49



兵庫県立

南但馬自然学校

HYOGO KENRITU MINAMI TAJIMA SHIZEN GAKKO

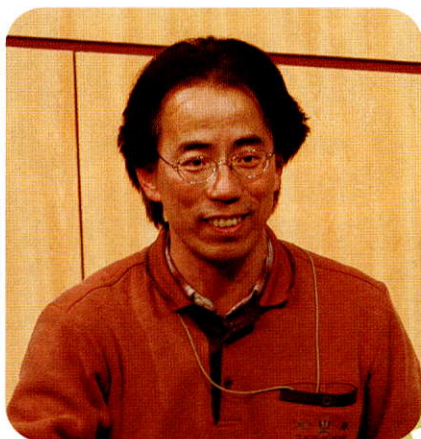
(Nature Education Center)

(里山に咲くシヨウジヨウバカマ)

講演記録

『自然学校が子どもに及ぼす影響と
家庭教育に求められること』

～平成18年度自然体験活動研修会から～



栗木 剛
Muto Hiroshi 事務局長

●はじめに

皆さん、こんにちは。今日は自然学校や自然体験と家庭教育の関係について話をさせていただきますが、私もこれまでに自然学校の現地指導にいったばい行きましたし、県下各地で開催されている「ひようごユースセミナー」にも関わっていますので、自然学校の現状はこんなふうですよといった情報もいくつか提供していきたいと思います。

まずは自己紹介を少ししますと、20代の頃は養護学校で教員をしていましたが、6年間で教員を辞めてしまいました。辞めて何をしようという目算がそれほどあったわけではありませんでした。私が今日の講演のように野外活動の話をするものから、昔からそんなことをしていたんだろうと思われがちなのですが、学生時代までは野外活動なんて全くしてなかったんです。それが、養護学校に勤務していた頃に療育キャンプというものがあって、キャンプファイヤーを上手に指導される先生がおられました。「はあー。おもしろいことをする人だなあ。」と興味を持ち、それから野外活動をやり始めたんですね。

それで、ひよつとしてこんなことも仕事になるかもしれないなと思って、「教員は辞めた。辞めても「こんなことではキャンプ屋で食べていけない。どうしようかな。」と悩んでいるときに、兵庫県で新しい事業が始まりました。私が教員を辞めた昭和63年から「自然学校」が始まったんです。平成3年からは、兵庫県の公立小学校5年生のみんなが行くようになったんです。

●自然学校始まる

「こんなことではキャンプ屋で食べていけない。どうしようかな。」と悩んでいるときに、兵庫県で新しい事業が始まりました。私が教員を辞めた昭和63年から「自然学校」が始まったんです。平成3年からは、兵庫県の公立小学校5年生のみんなが行くようになったんです。

最初は、自然学校って何をしていかわからなかったんです。それまでにあったのは、せいぜい1泊2日の林間学校とかですが、1泊2日の自然体験活動ってすごい勢いで日程消化されますよね。学校へ集まったから、「早くバスに乗れ！」って言われてキャンプ場へ。それもあんまり遠くへは行かず近場のキャンプ場だったりします。着いたらすぐに「早く降りて、荷物を片付けてこい！」と言われて、またすぐ集合です。集まったら、「よし。さっそくカレーを作るぞ！」ってカレー作りが始まるという勢いですよね。

●定番！カレーライスと
キャンプファイヤー

言うてはくれないので、ボーっとしていたんです。ところがそこへ、小学校に転勤になった途端、5年生の担任になった養護学校時代の同僚から、電話がかかってきたんです。「お前、キャンプの指導をしているとか言ってたよな。今度、自然学校があるんだけど、俺、一人じゃ無理なんで、一緒にやってくれないか。」ということで、私も自然学校に出会ったのです。

体験談として、皆さんにぜひ言っておきたいことがあります。カレーのことなのですが、カレーは「国民食」ではありません。何が何でもカレーを作る必要はありませんよ。確かにカレーは作るのも簡単に好き嫌



いもないだろうから野外炊飯のメニューにちょうどいいと思われがちですが、自然学校では少々問題なんです。片付けるのが実に面倒なんです。「あのギトギトの鍋、誰が洗うの?」という感じですよ。それも普段、家で洗いのをしている子が洗うのならいざ知らず、山の冷たい水と大量に放り込まれる食器用洗剤で洗ったりすると、もうどうしようもない状況になります。この大変さを十分に考えてあっさりしたものを作ってほしいのですが、いつもカレーなんです。学校の先生方は、その1回だけで終わりますが、私は自然学校の仕事をやっている間、

ずっとカレーを食べることになるわけ。ほんと笑い事ではないですよ。一緒に活動する学校のすべてがカレーを作る。しかも、カレーのルーはいろいろあるのに、なぜか、どの学校も判で押したように同じ銘柄のルーでカレー作りなんです。そんなこんなで、「それっ。カレーを作れ!」とせかす。子どもたちが「カレーがこぼれた!」って言うているのに、今度は「早く食べろ!」「早く片付けろ!」急げ。夜には次の活動があるんだ!という調子で進みます。

次は何があるんだろうと思っていると、「はい。片付けがきたら集合!」いか、今から向こうの広場に行くけど、一言も口をきいてはいけない。と、わけのわからないことを言われて、「何かなあ。」と思っているうちに、「1組、行け!」と言われる。行ったらその広場になんか大きな枕木みたいな丸太が何段にも積まれたものがある。そこに一番若い先生が待っていて、みんなが黙って座ったら、突然その先生が、「それでは、今から楽しいキャンプファイヤーやるぞ!」と立ち上がる。「楽しい!」と言われても、わけがわからない。それでも、火がついて歌

を歌い始めたら、子どもたちもだんだん気分が乗ってきて、「イエーイ! ヤッホー!」と踊り始め、盛り上がりだ。上がったなと思ったら、今度は「ハイ、おしまい。すぐに寝ろ!」と言われて、「えー!」っていう状態です。それでも、寝袋に入って寝ようと思うのだけれど、興奮して寝られない。それで、テントの中で騒いでいたら、10時半くらいにバツとテントが開いて、「こらあ。おまえらいつまで起きているんだ!」という先生の怒声が響く。それをじっとしてやり過ごし、また騒ごうと思っていたら知らぬ間に寝てしまっ、翌朝はまた「早く起きろ! ラジオ体操だ!」と言われたかと思うやいなや、バスに乗って学校へ帰っていく。

そんなことがずっと何十年も繰り返されてきたのに、突然、5泊6日になったんです。それから、そりゃあ先生たちも困ったんですよ。「えっと、何をしよう。夜は毎晩、キャンプファイヤーするのかな。」と、そんな状態だったんですよ。

●15回の飯盒炊飯! 社会見学、ナイター観戦?

私自身の体験話をずっと思ってきたんですが、やっぱり最初は大変でした。今だったら信じられない話ですけど、ある学校の自然学校説明会で、学校から「うちの学校は来年から5泊6日の自然学校へ行きます。」と説

明すると、保護者から「自然学校に行っている間、塾に行けないんだけど、その間の塾の勉強はどうしてくれるんですか?」と質問が出て、教頭先生が対応に困っておられたようなことを私も何度か見ました。最初の頃はこんなこともあったんですよ。自然学校へ行くということが、今のようにあたりまえじゃなかったんですね。

それから、自然学校5泊6日の間に食べる15食ほどもある食事のことですが、昔はすごい学校がありましたよ。今では考えられないけれど、15食全部を飯盒炊飯した学校もありました。すごいプログラムです。朝御飯を作って食べて片付けて、昼御飯を作って食べて片付けて、晩御飯を作って食べて片付けてと1日のプログラムが終わり、もう寝ない間に合わないという状況が毎日続くんですよ。その上、経費を安く抑えたいから、交代で来られる校長先生や教頭先生が車のトランクにジャガイモとかタマネギとかニンジン満載して持って来られる。とにかくすごかったです。

自然学校で社会見学というのもありました。「明日は何をするんですか。」と引率の先生に聞くと、「明日は、バスで出かけます。」とのこと。それで「どこへ行くんですか。」って聞いたたら、「テレビ局の見学に行きます。」という答でした。テレビ局の見学って自然学校かなと思いがちですが、それでも夜はキャンプ場に帰っ

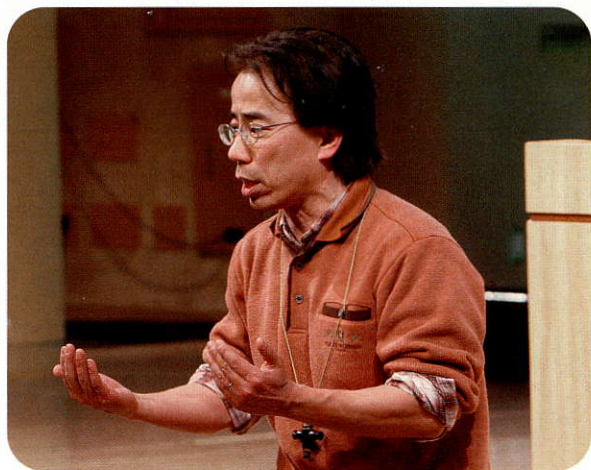
て飯盒炊飯かなと思っていたら、ちよつと寄るところがあるからと、行ったところが西宮球場。そのままプロ野球のナイター観戦でした。今では考えられないことかも知れませんが、そのぐらい最初は大変だったんですよ。もう、どうすればいいのという世界でしたね。

でも今は、どの学校も自然学校に行くのがあたりまえになっているし、子どもたちは子どもたちで自然学校を楽しみにして、親も自然学校でどんなことをするのか、だいたいわかってるので安心して子どもを送り出したりしているのですから、なんか歴史を感じますよね。

●米を洗う? 肉を洗う?

自然学校では、大人は大変だったけど、子どもたちがいい体験をしたのは皆さんも御承知のはずです。そのいい体験の中で絶対に外せないものがあるんです。それは、「家と違う環境を体験する」ということなんです。もう少しわかりやすく(乱暴に)言うと、「付き人」のいない環境の中で、5泊6日の生活をするということなんです。

自然学校の生活の中で、子どもたちは壁にぶち当たったり、困り果ててしまう場面を、私たちはよく見えていますし、子どもたちもそれを愚痴ってくれます。「だって、お母ちゃんはそのなこと教えてくれなかったもの。」と。



でも、自然学校に行くからといって子どもに料理を一生懸命に教えるお母さんがいますが、そんなことはなくていいんですよ。自然学校の野外炊飯でキュウリの「飾り切り」はしません。そんな難しい調理はしないんです。

そんなことより、もっとびっくりすることが起きます。まさに、事件は現場で起こるのです。米を飯盒で洗っていると、飯盒の中にモコモコと泡が盛り上がってくるのです。その泡は食器用洗剤の泡。「米を洗え。」と言われた瞬間に洗剤を入れて米を洗ってしまう子どもがいるのも現実なんです。ふざけているんじゃないんです。家で間違ったことを教えているわけでもないんですよ。

ね。

ただ、私が言いたいののは、せめて普段の生活の中で、その子は親が米をといでいるところを見ているのだろうか、親はその子に米をいでいるところを見させているだろうかということなんです。もし、見ていたなら、その子は洗剤を入れたりしないでしよう。それが、台所に入ってきたら、「お手伝いはしなくていいの。テレビでも見ててね。」と邪魔者扱いで追い払われて、家事の手伝いをさせてもらうどころか、見向きもされない。だから、「米を洗え。」と言われた途端に目の前の洗剤で米を洗ってしまうんです。その結果、飯盒の形のまま泡が盛り上がってくる。そういうことが現実にあるんです。

それから、カレーに入れる肉。もちろん高級料理店で使っているような角切りの肉ではなくて、薄いバラ肉ですが、その肉をわざわざ洗っている子がいるんですね。大げさに言っているわけではありませんよ。なんで肉をゆすぐのか。その子の家ではいつも肉をゆすいでいるのかなと思ってしまう。つまり、それだけ子どもの生活が、日常の家庭で普通に行われていることが(生活)と分離してしまっている状況が、自然学校ではとてもよくわかるんです。

●お風呂はおもしろい

それからお風呂。これもおもしろい。開校式で風呂の場所、時間などを説明します。「着替えを持って行けよ。」とまで言います。幼稚園だったら「パンツは持ちましたか? シャツは持ちましたか?」って言いますが、5年生だったらこれで十分なんです。でも、いろんな子がいるんですよ。何があってもタオルだけ少年「着替えも何にも持たずに、タオルだけ持って行く子です。お風呂の脱衣所で「あつ、着替え持ってきたい。」と気がつくのはまだいい方です。そういう子は服を脱ぐときにも全く気がつかないでどんどん脱ぐ。5年生なのにズボンとパンツを一緒に脱ぐ。バランスが悪いからと座って脱ぐからズボンとパンツは一緒にひっくり返る。広げてみるとひっくり返ったズボンがひっくり返ったパンツを履いている状態です。そういうしているうちに、その子は風呂から上がってきます。体を拭きながらだんだん気がつく。「風呂、面白かったなあ。」と言いながら隣を見て、初めて着替えを持ってきていないことに気づくんなんです。いくらなんでも風呂から宿舎までタオルだけでは行けない。そこで、この子は一世一代の勝負(?)に出ます。この危機をどう乗り越えようかと頭をフル回転させて、裏返った服を全部表にして、今日着たパンツ、シャツ、ズボン、体操服を着て部屋へ帰る。ところが、部屋に着いた頃には着替えのことはすっかり忘れて、部屋で遊び、そのまま寝る。そして、次の日もやっぱりタオルだけ持ってお風呂に行く。

だからずっと着替えがいらないうですよね。

そう考えると、自然学校って子どもが自立に向けて生活を見直すところもいい機会なんですね。家に帰った子どもが、「あんた、ほんまに着替えたんか？」と親から聞かれて、「家では着替えを風呂に持っていけないもんなあ。」「僕が風呂へ何も持たんと行っても、着替えを持ってきてくれる“付き人”がいるからこんなことになるんやなあ。」ということに気がつくのではないだろうか。

全くの自然の中で生きる（生活する）のであれば、もっと山奥へ行かなければなりません。すごい山奥へ行くと、車の音も人の声も全く聞こえなくて、食事はすべて自分で作らないといけないようなところで生活すれば、それが本当の意味での自然体験なのかも知れませんが、そこまで行かなくても、家と全くの自然との中間地点くらいで、子どもたちが大きな不安を覚えない、ほどよい程度のところで、“付き人”のいない生活をさせることが重要だと思いますね。そして、それが長年キャンプを経験してきた私が言うのもなんですけど、他にはない兵庫県ならではの自然学校のすばらしいところだと思います。

●家庭の問題

5泊6日の自然学校の中で、子どもは少しずつ変わってきます（と言

うよりも、本来の生活に戻るといった方がいいかも……。3日目くらいになると、猫の皮も虎の皮も全部はがれて、家でやっているとおりの行動をとるようになりますね。家でしゃべっているとおりにしゃべるようになる。言葉の最後に「…ポケ！」という言葉が入るようになる子もいます。きっと家でもそう言っているんでしょうね。もしかしたら、親もそう言ったりするかも知れませんか。家庭での様子が自然学校の中に見えてくるのですが、家庭でも、ある年齢から手のひらを返したように、「もうお前は5年生なんだから、自分の事は自分で全部しなさい。」とは言えないでしょう。

子どもが自分の身の回りのことをしたいと一番言ってくるのは、保育園の年長から小学校1・2年生くらいまでです。その時期の子どもは大人のそばに来て、「なあ。何してるの？何を切ってるの？今日の晩御飯は何？」とまとわりついてきますよね。その子に向かって「向こうへ行ってテレビを見といて。」と追い返していませんか。でも、これが5年生くらいになると、今度は「家事の手伝いをしてくれる？」って言ってもそうはいきません。「塾があるから……」「宿題があるから……」と言って家の事をひとつもしなくなります。そして、そのまま自然学校にやってくる。そんな子どもに飯盒を洗ってもらうと、すぐに「洗えました。」と飯盒を持って来ます。子どもの顔

は真顔です。「こんなに頑張った洗ったんだよ！」と持ってきた飯盒を見てみると、底の隅に御飯粒がアリの行列のようにびっしりついていて。けれども、子どもは「洗えた。」と持って来るんです。それで洗えていると思っているんでしょうか？

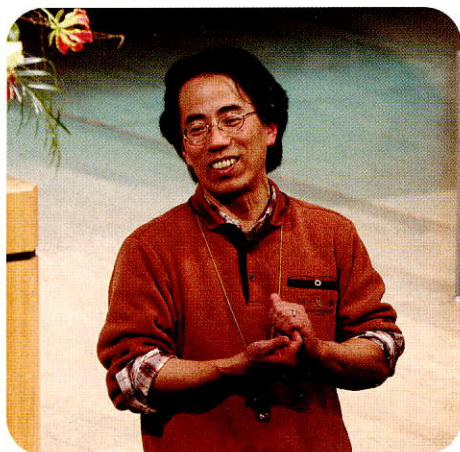
家で食器を一生懸命に洗って、「ああきれいになったね。」と言われた（褒められた）経験がなかったら、いくらキャンプ場で食器を洗わせても無理なんです。だって、キャンプ場の炊事場で洗うほうが洗いにくいし、ほとんどのキャンプ場はお湯も出ません。施設によっては厳しい点検もあります。そういうことで子どもたちが「キャンプは面白くない。」となってしまう可能性が大きいのは、キャンプ場や施設が悪いのではなくて、家庭の問題なのではないでしょうか。

●現場から家庭へ発信

野外炊飯の後片づけで器材の返却時に点検がありますよね。かなり昔の話ですが、その点検がとっても厳しい施設がありました。点検に習字用の半紙で鍋の底を拭いて、「黒い！やり直し。」いくら何でもそれはきついだらうという話ですが、そんなのが実際10年、15年前にはあたりまえにあったんですね。だから、当時、キャンプに行った人は「楽しかった。また行こう！」という人と「キャンプなんて二度としないぞ！」という人の二派に分かれちゃっているんですよ。

だからといって、子どもを甘やかして、ゆるいルールで対応してくれという話をしようとしているのではありません。こうしたキャンプ場での子どもたちの実態を家庭に伝えてアプローチしていかないと自然体験をしている意味がないのではないかなと思うんです。いろんなプログラムが考えられて、一生懸命にそのプログラムを実践することは、とってもいいことだと思われ、研究成果もいっぱい出ています。学校の先生も指導補助員の方々も本当に努力されています。でも、そこで得た自然体験の良さを保護者や地域に伝えていけなかったら、屋根の上に子どもを上げておいて、梯子を外してしまうようなものだと思うんです。

いかにして保護者や地域の方々に、自然学校の記録ビデオの鑑賞会では



見えない子どもたちの実態を伝え、「子どもたちの実態はこうだから、家庭でこういうことをしてもらいたい。こういうことをしたらいいのではないですか。」ということをもっと発信していったら、自然学校の体験というものが今以上に生きてくるのではないでしょう。

●自然学校を経験した子どもたちが親に…

ある時、私が保育園での講演会を終えると、若いお母さんが二人ほど駆け寄ってきて、「栗木さん、〇〇小学校の自然学校に行ったことがあるでしょう。私たちその時の児童だったんですよ。」って言うんですよ。

「変な歌を歌っていたでしょう。」と思ひ出話をされながら…。確かに当時は、仕事のためだとセーラーミュージンも踊りました。後に伴田来未が歌うと思わなかったから、キューティーハニーも踊りました。もう振付けは忘れただけでも…。でも、私がそんなことをしていた時代に子どもだった人たちが、親になって自分の子どもを育てているのですから、自然学校にも歴史を感じますし、大きなことだと思えますね。

●自然の3K

「自然はいいよ！」って頭ごなしに子どもたちに言う人がいますが、自然がいいということを理解させるに

は、それまでの前段階が必要だと思ふんですよ。

自然学校の初日、日程説明をする時のことですが、広場に集まった子どもたちは、とりあえずしゃがんでゐる。子どもたちに「ちょっと話が長くなるし、しゃがむのは疲れるから、お尻をつけて座ろう。」と言った途端に、特に女の子から「えー。」っていう声があがります。下は土だから。その子たちはけっしてお尻をつけて座らないですね。体操服だったら座るかもしれないけど、私服だったら座ります座ろうとしないです。それこそ但馬の兎和野高原だったら土は真っ黒。あの黒い火山灰が服についたらとれない。だから事前に、「使い古しの色の濃い服を着させてください。」と言ってあるのに、なぜかそういう時に限って、真っ白なトレーナーとか、胸に刺繍のしてある高そうな服なんですよ。子どもも着ている服を汚しちゃおうとか思えばいいのだけれど、子どもたちは座れないんですね。

なぜ座れないかというところ、恐らく、都会でも田舎でも、親が「自然は汚いもの。」と子どもたちについて言っただけで、子どもたちにとっては、学校で先生や施設の人が、「どうだ、自然はいいだろう！」って言うたとしても、子どもたちは、小さい頃から親に「地面に寝そべったり、草むらに手をつた込んだりしたら、何があるかわからないからやめな

い。」みたいなことを言われてきている。それに、子どもたちが自然の中から見つけてくるもの（捕まえてくるもの）っていうのが、不思議と足の数が多生き物か全くない生き物が多いんですよ。そんなものを持つて来て、お母さんに見せたら、「きゃあ、気持ち悪い！」みたいな態度を取ってしまうでしょ。外で遊んで帰ってきた子どもが服を泥んこにしていたら、「まあ、汚い。こんな汚い、怖い、気色悪い。この3つを、自然の3K」って言いますけど、この「自然の3K」を小さい頃からずっと言われ続けてきて、それで自然学校で「自然はいいだろう！」と言われても、子どもたちは「そうかなあ。」となるわけです。そこへもってきて、さらに「自然は雄大でいいだろう。さあ、この自然とどっぷり触れ合おうぞ！」などと言われても、子どもたちは、心の中では「無理、無理。絶対無理！」と思っっているんですよ。

前段階でのいろんな条件整備とか手だてがないままに、いきなり（本格的な）自然体験に一足飛びに行ってしまうと、子どもたちにとっては、かえって「ストレス」なんですよ。

●家庭の「頑張り」が大事！

小さい頃からの家庭における自然に対する悪いイメージの刷り込みや自然に対する変な先入観がない状態

で自然学校に行ったらしたら、そこに広がる風景、新緑の林、鳥の鳴き声、風の渡る音、青い空、白い雲、そのすべてが「素晴らしいなあ！」ってことになるはずですよ。さっき言った自然に対する小さい頃からの何らかの押さえつけがなければ、子どもたちも素直に体験できるわけですが、地面や草むらに触ったりすることが汚いことだと思っただけで、自然の中へ行くことが、まるで「お化け屋敷」にでも行くみたいになっちゃってしまっているんですよ。

このギャップをどう埋めるかというところが家庭教育に求められることだと思ふんですね。何も親がすごく虫好きでなくてもいいとは思いますが、子どもが虫を持つて来たら、「きゃー！」って大人（親）のほうに嫌がっていたのでは、子どもは虫を好きにはなれません。心の中では「いやだ。無理！」と思っただけで、顔にはそういう表情を出さずに頑張り続けるわけです。この「頑張り」が、子どもが将来、自然というものに関わること（自然の中に入っていくこと）ができるかどうかにかき影響してくる部分なんだと思ふます。

今の時代、田舎に生活していても、なかなか山（自然）の中には入れません。それは当然かもしれません。でも、その中で自然体験というものをより有効に実践していくために、大人（親）にその良さを訴え、なお且つ、子どもたちにどう具体的に接



していったらいいのを発信していかないといけないと思います。

今、子どもたちにどうやって自然と触れ合わせるのか、どうやって前段階の勉強（自然体験）をさせていくのかといったことをこの場におられる皆さんが、発信していかないといけないのではないのでしょうか。

●田舎の子どもは歩かない？

年々、子どもと自然体験との隔たりが大きくなっているように思います。その一つに、田舎の子どももほど足腰が弱っているように思います。

以前に南但馬自然学校で山登りをしたときにもそう思いました。都市部の子どものほうがちゃんと山頂まで登ります。田舎の子どもたちは、途中で何人も「勘弁してくれ：。」って

言いますよ。山頂からの景色の素晴らしさを話しても、みんな登ろうと話しても、「下山の時にここ通るなら、それまでここで待ってる：。」ってその場に腰を下ろしてしまいう子どもが何人もいるんですよ。

なぜこんなことになってきたのか。私は、今は明石に住んでいます。岡山県のすごい田舎の出身なので、田舎のことはよく知っています。今は田舎の子どももほど歩かないんです。

確かに交通事故もあるし、不審者のこともある。歩かせられない事情もわかります。でも、車庫までも歩かない。おじいちゃんが「軽トラで送ってやろう。」って言った途端、子ども

は靴を履いて玄関に座って待つんですね。元気な子どものほうが玄関で待って、腰の痛いおじいちゃんのほうが車庫まで歩いていく。玄関に横づけされた軽トラのドアもおじいちゃんが開ける。子どもは歩かないし、何もしないわけですよ。

確かにバス代も高い、不審者も心配、塾に送らないといけないのはわかります。でも、朝は晴れていて、昼から雨が降り出した日の田舎の中学校や高校の周り、どれだけの「付き人」が自家用車を並べているか御存知でしょうか？

●オリエンテーリングに出発したけど帰れない？

今、自然学校で実施しているプログラムは以前と比べるとかなり変わってきていますね。登山やサイクリングは減っています。飯盒炊飯も減っていますね。オリエンテーリングにいたっては、させたくてもさせられないプログラムになっているように思います。地図が読めないんですね。昔も今も地図の読み方は教えています。地図も簡単にして、コンパスも見やすい大きいものを作って、地図の読み方を再度教えて出発させる。10年前の自然学校の子どもたちなら、迷いながらも帰ってきていました。ある施設のオリエンテーリングでも、1時間くらいで廻れるコースに2時間くらいかかっていましたが、それでもゴールはできてい

ました。でも、今、そんなオリエンテーリングをやったら、恐らく4割ほどの班は帰ってこないと思いますよ。迷うんじゃないかと、帰ってこれないんです。2時間以上過ぎて、地元の人から、「子どもたちが、あぜ道をトボトボと歩いているが：。」って電話がかかってくる。仕方がないからワゴン車で迎えに行く。もちろん子どもたちだけで行かせているのではなく、リーダーの学生と一緒にやっているのですが、その学生も迷うんです。学生までもが地図が読めないんですね。

私たちが前提概念として持っている、子どもは自然の中にあってもこれくらいのことはできるだろうとか、このプログラムをやったらこのくらいのことは楽しめるだろうというものが、ほとんど崩れているんですね。

●お互いの情報交換が大切！

「飯盒で炊いた御飯はうまい」って言うのは、ある年代より上の先生たちだと思っています。子どもたちや（もしかしたら）若い先生たちは、食べながら「いや、炊飯器で炊いた御飯のほうが絶対うまい。」と思っているんですね。そんな状態で「自然はいだらう！」と言っても、自然体験は進まないですし、深まりもしない。ここなんです。ここが遊離したら、何のために自然学校を続けているのかということになるのではないのでしょうか。



お互いの情報をお互いをもっと提供すべきじゃないでしょうか。現場からは、「いい話はたくさんありますけど、こんなハプニングがありました。」とか、「子どもたちは、今、こんな失敗をしています。」というようなことを具体的に情報提供すれば、保護者は、「ああ、うちの子はこれができる、これできないのか。」と容易に気がつくのではないのでしょうか。逆に、家庭からは、「うちの子はこんなことができないけど、大丈夫で

しょうか。」といった現実的な話をもっとしていかないといけないと思います。そうでないと、プログラムが上滑りになってしまつて、自然学校で一番楽しかったことがお風呂に入ったことで、一番辛かったことが長い石段を上り下りしたことになってしまふわけです。そのようなお互いの情報交換ができないだろうか。今日も南但馬自然学校からたくさん資料が提供されています。その中には、たくさんさんの研究成果も情報提供されているはずですが、私も出された研究成果をたくさん見てきました。でも、それを家庭や地域の方々に、「自然学校ってこんなことなんですよ」と、通訳する人やその手立てがないと情報提供の効果は薄いものとなつてしまふ。お互いが情報交換できてこそ、自然学校と家庭や地域がつながっていくことになるのではないのでしょうか。

この研修会みたいな「自然学校と家庭や地域でやっている自然体験がこんなところにつながっているんですよ。こんなことがあるんですよ」っていうようなことをお互いに情報交換できる機会をもっともってほしいのと思いますね。

● 生きる力につながる自然体験

学校ではおとなしくて目立たないけど、野外（自然の中）へ来ると、生き生きとしている子どももっていますよね。妙な能力（？）を持っている子が脚光を浴びたりするんです。特に火を熾すのがうまい子はみんなの注目の的です。他の子どもたちは、なんか新聞はギューギューに固く丸めてしまふし、かまどには薪をいっぱい詰めて、マッチを擦ったら、火がついた途端に放り投げる。そんなことでは火がついたりしないですよ。ところが、その普段はおとなしく目立たない子は、新聞の丸め方も、薪の入れ方も、マッチの付け方もすごく上手だったりするんですね。他の班のかまどは煙がモクモクと上がっているだけに、その子のいるかまどは勢いよく燃えているといったことがよくあるんですよ。

火熾して脚光を浴びた子に「ボーイスカウトをやっていたの？」と聞くと、そうじゃない。YMCAでもないらしい。でも、それまでにどこかでそんな体験をやっているはずなんです。でないと、あんなに上手に火を熾せない。それまでの前段階での体験（経験）があるかないかというところがすごく重要になってくるのだと思いますね。

そう考えると、自然体験というのは火を使うことをはじめとして生きていくための力（生きる力）につな

がってきます。ところが、（自然体験が生きていく力になるのに）家庭ではその芽が出ようとすると、それを摘んでしまつてしまうようにも思えるのです。例えば、不思議に田舎の子どもほど農作業を手伝われないんですよ。田んぼには入らなくていいと言われる。小さい頃から農作業を手伝わせなければ、か、田んぼを見ることすら、させなくなっているのが現実です。これでは生きていけない（生きる力は身につかない）ですよ。身近な自然体験があつて、身の回りのことができていつてこそ、自然学校でいろんなことがわかつたり、つながったりするから楽しめるわけです。

皆さんの家庭、さらに近所やその地域の子どもたちに「生きる力」がありますか。いざという時にうちの子は生きていけるだろうか。自然の中に放り出されても、何か災害があつたとしても、なんとか生きていけるだろうか。

そのことは、それまでの自然体験とすごく関わっているというのは今までにお話ししてきました。ところが、私たちの周りに危ない子どもたちがたくさんいるような気がします。大人になるまでに必要な経験をせずに、そのまま大きくなってしまふ子どもたち。そして、そんな子どもたちには生きる力を出させないようになつてしまつて大人が大勢いるような気がするんですよ。

● 自然体験を家庭教育に

さて、とりあえず自然の中に子どもを放り込めば、自然体験ができていくというものではないということは、わかっていただけたと思います。

今、子どもたちはこういう状態にあるんだ。こういう生活体験をしてきている子どもたちなんだということをしっかりと受け止め、大人が計画的にこの子どもたちに見合った、ストレスにならない自然体験を計画してあげると、自然というのはすごく有効なものになります。なお且つ、「付き人」がいらないだからなおさらです。でも、そこでの自然体験は、「子どもたちがこんな体験をしたら、ひよっとしたらこんなことに気づくかもしれないな」というくらいに思っておく方がいいかもしれません。一週間かそこらで性格や中身までが変わったりはしませんよね。でも、自然学校を経験したのとはいいものでは全然違うと思います。こうした経験をしておくと、これを訓練というとおかしくなりますが、子どもたちが「自分ひとりでやってみただけ、結構できるんだなあ。」と思うんですよ。今まで「付き人」に全部やってもらっていたことを自分でやってみた。すると、身の回りのことも結構できて、その上、それができると何だか嬉しい。しかも、先生が「お前、できるんだな。」って褒めてくれるもんだから、「そうかな。」って嬉しく

なる。そんな体験をする場所が自然学校だと思うんですね。

そして、「こういうところに子どもたちは気がつきましたよ。」「こういうところにつまずいていましたよ。」「こんな工夫をしましたよ。」っていうことを上手に情報として発信していくことで、家庭でも「そうかじゃあ、家にいる時間のほうが長いんだから、家でもこんなことをしたらいいのかな。」って思うきっかけができると思うんです。お互いが情報提供をすることでめつめつと近い存在になれると思います。

自然学校をただ単に行って帰ってくるだけの行事にしないようにしなければならぬと思いますね。そして、学校の先生だけがヘトヘトになつてするんじゃなく、保護者や地域の方々もみんなが楽しみにして、子どもたちにこんな一面もあったんだと気づくことが嬉しくて。みんなが嬉しくなつて、自然学校を盛り



上げていく。そうなっていかなければならないと思いますね。

それから、自然学校は「終わったらバンザイ」じゃなくて、逆にスタートなのかもしれないですね。その時が、子どもと一緒に、家庭教育というものを自然体験を踏まえて考えていくすごくいいチャンスなんだと思います。

● おわりに

今日、何かの御縁でここに集まれた皆さん。南但馬自然学校に行ってみたことありますか。もし、なかつたら、ぜひ一度行ってみてください。そして、子どもと一緒にあの長い石段を体験してもらいましょう。「ふーん、こんなところで子どもたちは生活するんだ。」「こんなイベントもやっているんだ。」と新しい発見がありますよ。一度そういった施設に行ってみると、今度は他の施設が気になってきます。そうしたら、他の施設にもどんどん行ってみましょう。

皆さん一人ひとりが自然体験、自然学校に興味を持ってもらって、自然体験っていうのは、ただ自然の中に子どもたちを放り込めばいいってものじゃなく、それまでの段階が重要だったり、うまく計画や仕掛けがされていたりすることを再確認してもらえればと思います。

そして、自然体験や自然学校の面白い話、面白い情報を掴んだら、お

買い物ついでに会った人にどんなにしゃべりましょう。だって、その人たちは首に縄をつけてもこういった研修会には絶対に来ない人だと思っています。講演会や研修会というのは、聞かせたい人ほど来ないという法則(?)があつたりしますよね。だから、皆さんに周りの人たちに広めてもらうのが一番なのです。「自然学校って兵庫だけしかやってないんですよ。」とか「自然学校ではこんなこともやるらしい。」とか「自然学校に行くまでの体験が大事らしい。」とか。いろんな話をしてくだささい。そんな話(情報交換)が地域で盛り上がりつつあることが、自然学校が、そして子どもたちの自然体験が家庭とつながり、地域とつながっていくのだと思います。

今日は、ほんとにヤンチャな話に長時間お付き合ひいただき、ありがとうございました。

*この講演記録は、平成19年1月28日(日)に福崎町エルデホールで開催した自然体験活動研修会での内容です。

栗木剛氏の講演を要約したものです。

平成18年度自然体験活動研修会「情報提供」から

『自然学校の活動紹介と実施における留意点について』

兵庫県立南但馬自然学校

主任指導主事 芦田 哲

はじめに

自然学校は、昭和63年からスタートし、19年が経過した。その間、県民の約18%、約100万人が自然学校を経験してきた。

今回の研修会の主な対象者が保護者の方々であるため、自然学校の変遷や本校が利用校に伝えていること、自然体験の教育的効果等について情報提供させていただくことにより、自然学校に対する理解を深めていただくとともに家庭教育への参考になれば幸いである。

●プログラムの変遷

まずプログラムであるが、自然学校実施当初は出来る限り多くの体験を児童にさせてやりたいという思いが教員にあったのか、過密なスケ

ジュールを組む学校が多かった。その後、その反省をもとに、しだいにゆとりあるプログラムを重視する学校が増えてきた。7年ほど前からは、児童が計画段階から参画したり児童が自ら活動を選ぶ選択活動を多く取り入れる学校が増えてきた。私は本校に勤務して7年が経過したが、活動内容等にも変化を感じることが多くある。当初は肝試しやアマゴつかみを実施する学校が多かった。しかし、現在ではそのような活動をする学校はなく、ナイトハイクリや環境教育を意識した水中生物観察や水質調査を実施する学校が多くなった。また、自然物クラフトでは当初3時間から半日程度で実施する学校が多かったが、近年は、素材集めから始めて、児童が思い思いの作品を一日かけて仕上げる学校が増加傾向にある。

キャンプファイヤーは、退校する前日に実施する学校がほとんどであったが、ここ数年はねらいにより実施日が変化してきた。児童の緊張を解したり、モチベーションを高めたりすることをねらいに実施する場合は初日の夜、前半の活動を振り返り後半への士気を高めたいという願いがある場合は中日、自然学校を振り返る機会と位置づけている場合は退校する前日と、ねらいによつてキャンプファイヤーの実施日を設定する学校が増えてきた。じつくりと振り返りの時間を確保したいというねらいでグループファイヤーやキャンドルサービス、生活棟でランタンの灯を囲んでのグループタイムを実施するなどその形態も変化してきた。何年か前までの入校初日の活動は、施設の位置を確認しながらポイントごとに設定されたクイズに答えるというものが多かった。近年では、イニシアティブゲーム②を取り入れて児童の仲間意識を高める工夫をしたり、パッケージジドロプログラム③等を組み入れた施設散策をしながら児童が自然に目を向けるような手立てを講じる学校も増えてきており、工夫された活動が展開されるようになってきた。

●自然学校実施における留意点

自然学校を実施するにあたって、本校がその留意点としていることは、まず第一に、「ねらいを明確にする」ことである。そのことによつて活動内容も自ずと決まり、後の評価にもつながっていく。ねらいを達成するためには、教師の「しかけ」が重要である。自然に目を向けさせ、様々なことに気づいてほしいという願いがあるなら、児童が自然に目を向けるための教師の「しかけ」が必要である。「五感を働かせる」とはよく言われることであるが、味覚、臭覚、触覚は意識しなくとも感じるものである。しかし、「聞き漏らす」「見過ごす」という言葉があるように、聴覚と視覚は意識しないと感しないものである。この聴覚と視覚に訴える「しかけ」が必要なのである。

第二に、「ゆとりあるプログラム」の計画である。子どもたちが試行錯誤する時間、失敗してもやり直せる時間、みんなで話し合う時間を確保するためにも、ゆとりあるプログラムが重要であり、自然学校では、「児童を「待つ」「時間が確保できる」というメリットを最大限に生かしてほしい」ということである。指示待ち人間とはよく聞く言葉であるが、活動中に児童が間違ったことをしていたり、作業が遅かったりするとすぐに

教師が口や手を出してしまうことがある。危険なことがないかと常に見守ることは大切であるが、少々のことには手を貸さないということも重要なことである。失敗し、苦勞し、考えながら、大人の助けを借りずに自分や班の友だちだけで活動をやり遂げた時、その達成感や満足感はいくら大きなものとなるはずである。そのことが自信となり、児童が様々なことに主体的に取り組む意欲づけともなるのではないだろうか。活動は、ねらいを達成するための一つの手段であるということを忘れてはいけな

いだろう。

第三に、「活動を振り返る」ことである。活動を終えてすぐに次の活動に進むのではなく、体験を通して気づき、発見したことを活動の後に振り返り、そのことを共に体験した友だちと分かち合い、以後の活動に生かすことによつて学びを深めていくことが大切である。あくまで、良きプログラムを提供することが前提である。

●生きる力と自然体験

次に、生きる力と自然体験について述べる。生きる力とは、確かな学力、豊かな人間性、健康・体力・耐性を意味する。学力には、学習と体得の二面がある。学習とは教室内での学び、体得とは教室外の学びで

ある。そして、学習の前提条件となるのが、体力と耐性であると言われる。2年ほど前、国立オリンピック記念青少年総合センターから、自然体験が豊富な子どもほど体力に自信を持っているという報告がなされた。本校が実施したアンケート調査結果からも、自然体験の豊富な子どもほど耐性が身についているという傾向が見られた。つまり、自然体験が豊富な子どもほど学習の前提条件を身につけている傾向にあると言える。体得とは、まさに自然体験を含めた体験活動のことである。本校の調査研究においても、自然体験が豊富な子どもほど協調性、向上心、興味・関心、思いやりの心、自尊感情等の豊かな人間性が身につけているという傾向にあることを結果として得ている。

また、平成10年に実施された当時の文部省の調査では、自然体験、体験活動、家のお手伝いをよくする子どもほど、正義感・道徳感が充実しているという報告がなされ、国立オリンピック記念青少年総合センターからも、自然体験が豊富な子どもほど得意な教科が多いという報告がなされている。その他、自然体験がもたらす教育的効果については、様々な調査が実施され、その有効性が立証されてきた。結論として、生きる力を身につけるには、自然体験を含めた体験活動がとても有効というこ

とになる。その意味で、自然学校が果たす役割は大きいと考える。自然体験がもたらす教育的効果については、本校の調査研究委員会でも検証し、研究紀要としてまとめたものを、御一読いただければ幸いである。

私には二人の子どもがいるが、子育てには反省することがとても多い。できる限り子どもたちに手伝いをさせれば良かったと思うし、もっと私と一緒に様々な作業や体験をさせれば良かったと思う。もう一つは、叱ることが多く、褒めてやること

があまりなかったということである。感情的に叱って子どもが素直に聞くということはなかったような気がする。子ども自身がよく考えながら様々なことに気づき、今後どのような行動をとっていけば良いのかを考える、その支援者的な立場で接してやればよかったと反省している。息子が小学校低学年の頃に石に興味を持ったことがあった。その時は何度も一緒に河原へ行き石を拾ったものであるが、それでももっと様々な自然体験を一緒にしておけば良かったと思う。

「知ることは、感じることの半分も重要ではない」とは、レイチェル・カーソンの言葉である。様々なことを知ろうとしても、実際に感じ、腑に落ちなければ、知識として身につかないのである。また学力とは、学習(教室内)と体得(教室外)の二

つを意味することは先にも述べたが、このバランスが崩れている子どもが多いと考える。子どもたちに対する教育を今後どのように行っていくかが、現在、大きな問題として取り上げられている。学校、家庭、地域のそれぞれがなすべきことは何なのかを今一度考え、整理し、具現化していくことが重要なことではないだろうか。

《用語》

1) ナイトハイク

夜の森を歩き、雰囲気や風景の神秘さを感じる活動

2) イニシアティブゲーム

野外や自然あるいは人工物を利用して作られた課題を、グループ内の参加者で協力して解決していく活動

3) パッケージドプログラム

小テーマに関して集中的に学ぶための実験・観察・体験活動のテキストや教材のパッケージ

* 「本校のアンケート調査」については、平成17・18年度兵庫県立南但馬自然学校研究紀要を参照してください。

『南但馬自然学校における
健康管理と安全対策』

兵庫県立南但馬自然学校
指導主事 増田千代子

●はじめに

自然学校は小学校生活6年間の
中で子どもたちが最も楽しみにし
ている行事の一つです。月曜日に
は心配そうだった子どもたちも、
日ごとに集団生活に慣れ、ホーム
シック気味だった子どもも、水曜
日を過ぎると元氣を取り戻し笑顔
が見られるようになります。6日
間様々な活動を仲間と共に体験し
て、一生に一度の大切な思い出を
元氣に持ち帰れるよう、本校では
次のような体制で健康管理と安全
対策を行っています。

●事前の健康状態の
把握と指導

- (1) 下見対応や事前電話相談で児童
の健康状態とその対応等を把握
する。
- (2) 児童全員の健康状態（風邪や伝
染性疾患等の流行状況など）を
把握する。
- (3) 配慮を要する児童については、
下記の内容等について詳しく把
握する。

既往 症等	・ 病状の程度により学校と相談し、近隣病院への依頼（主治医からの紹介状等） ・ 持参する薬及び器具等の管理方法の確認 ・ 活動内容についての相談（病状等を考慮した活動）
食 事	・ 食事制限のある場合（既往症、食物アナフィラキシー、食物アレルギー） ・ 該当食物、代替食、除去食の確認（食堂とメニューの打合せ） ・ 食堂と学校及び保護者との直接打ち合わせ ・ 持参する食品、専門業者へ依頼する食品の保管方法・調理方法の確認
生活等	・ 肢体不自由、車椅子等使用…身障者対応の生活棟（身障者用バス・トイレ完備） ・ 食事・入浴・排泄及び施設内の移動など配慮すべき点について利用校 職員・保護者と確認

※学校と相談の上、必要時は保護者や主治医と直接連絡をとり情報収集
→利用校と本校の全職員が対応や配慮事項について共通理解

(4) 季節や気候に合った保健指導、助言や資料提供

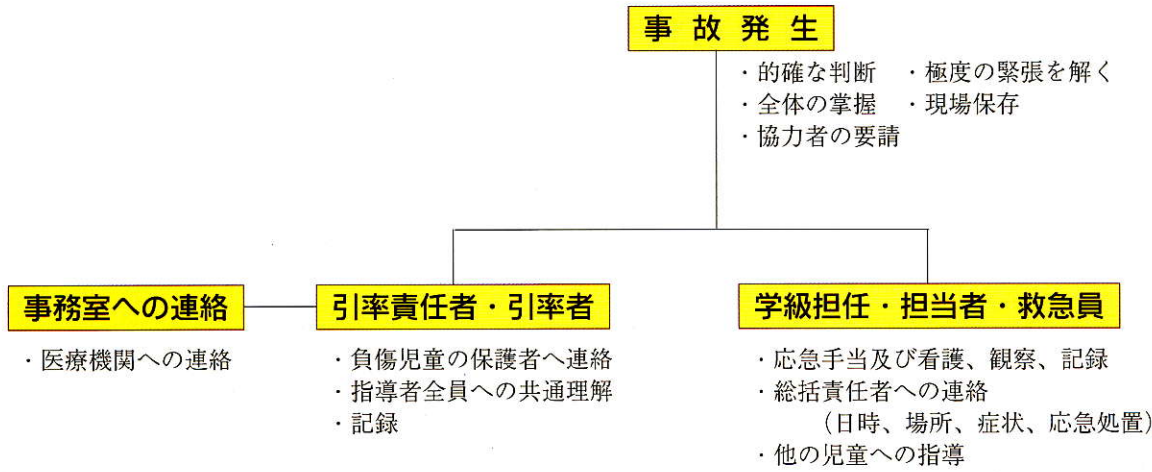
月	季節の様子（天候・動植物）	指 導 ・ 助 言 ・ 情 報 提 供
4 ・ 5 月	昼夜の気温差が激しい 紫外線が強くなる 危険な動植物の活動が始まる 花粉のシーズン	・ 気温に合わせて衣服の調節が必要 ・ 連休明けの疲れに注意 ・ 毒蛇、ハチ、ヒル等の情報提供と指導 ・ 花粉症などのアレルギー症状に注意
6 月	気温、湿度が高くなる 天候が不順になりやすい 降水確率が高い	・ 食中毒の発生率が高くなるため野外炊飯の食材の扱いに注意 ・ 喘息発作等を起こしやすいため健康管理に注意 ・ 雨にぬれた時の対応（着替え等体温保持に注意）
7 月	気温、湿度が高い	・ 熱中症の防止 （活動場所、内容、時間、服装に注意。健康観察、水分補給） ・ 食中毒予防の徹底
9 月	危険な動植物のシーズン 気温の高い日がある	・ 毒蛇、ハチ、ヒル等に要注意 ・ 食中毒予防
10 月	秋の花粉のシーズン 天候が不順になりやすい	・ 秋の花粉に注意 ・ 喘息発作等を起こしやすいため健康管理に注意 ・ 涼しい日が多くなるが、食中毒に注意
11 月	昼夜の気温差が激しくなる 感染症の流行が始まる	・ 衣服の調節や室内の温度及び湿度調整 ・ 予防のため、特に手洗いうがい、換気の徹底
12 月	気温が下がる 夜間の冷え込みが厳しくなる	・ 防水、防寒対応の服装を指導。 ・ 夜は活動時間や服装に注意し、湯冷めをしないように入浴 時間を考慮 ・ 入浴後の指導（体温保持）
1 ・ 2 月	日中も寒い日が多い 感染症の流行がピークとなる	・ 活動時の服装は防水防寒対応のものを指導 ・ 夜間の室温調整 ・ インフルエンザ、ノロウイルス等の流行に注意。 ・ 健康観察を丁寧にし、体調不良の児童は早めに受診

●実施中の健康管理と
保健・安全指導

- (1) 入校時
 - ・児童の健康状態の確認
 - ・病院受診時の動きの確認
 - (連絡方法、搬送方法、場所、持参する物等)
 - ・利用校の連絡網と本校との連絡方法を確認
 - ・オリエンテーションでの児童への健康安全指導
 - (施設の安全な利用方法、食中毒の予防、危険な動植物、季節に応じた保健指導等)
 - ・食物アレルギー等に係る児童の代替食の最終確認、受け取り方法の確認
- (2) 活動時
 - ・毎日の打ち合わせで健康状態の把握
 - ・可能な範囲で児童の活動状況を観察(健康観察、安全面の確認)、週担当指導主事等と情報交換
 - ・利用校職員や救急員と連絡を密にし、確実に引継連絡(医務室利用の状況については利用校職員が把握し、精神面のケアはできるだけ利用校職員とともに対応)
- ・具体的な指導及び確認事項

安 全 指 導	・ 活動内容や活動場所の最終的な安全指導 (危険箇所、交通事情、利用施設、必要な道具や備品、気候、健康状態、コース等の確認) ・ 危険性が高い場合、安全指導が特に必要な場合は、直接又は間接的に指導 (マウンテンバイクの事前指導、活動中の交通安全指導及び巡回指導等)
連 絡 体 制	・ 活動場所、活動数、活動内容等にあわせて連絡体制を確認し共通理解体制 (複数の活動を同時に実施する場合、複数の学校が実施している場合) ・ 本校を離れて、他の施設を利用する際は、利用施設の連絡先と滞在時間を確認
そ の 他	・ 配慮の必要な児童の活動状況を確認 ・ 食中毒予防のため、調理方法、野外炊飯用具の消毒や手洗いの指導 ・ 買出しによる食材購入では、食品の鮮度が落ちないように配慮することを指導

●緊急時の対応



- (1)緊急を要する場合…応急処置、学校長の判断で救急車の要請及び病院搬送
- (2)緊急を要しないが受診の必要な場合…学校長が判断(症状、程度、経過等把握)
- (3)受診の必要がない…処置後利用校職員へ連絡、記録、引継ぎを確実に行う。

●実施後の対応

- (1) 自然学校終了後、児童の健康状態を確認し、記録をとる。
- ・参加児童全員の確認
- ・特に実施中、体調不良となった児童の経過確認
- ・負傷児童の経過確認
- (2) 傷病統計を作成し、傷病に関するデータを蓄積する。
- (3) 児童の実態にあった対応や配慮がなされていたかを反省する。
- (4) 健康管理・安全対策での問題等がなかったかを検討する。

(5) 自然学校実施報告書、救急員アンケートをもとに課題等をまとめ、考察する。

以上のことを今後の指導につなげる。

●おわりに

子どもたちが楽しみにしている自然学校ですが、平成18年度の傷病統計から見ると、体調不良などによる内科的な受診は0.2%（28,392人中43名）負傷による外科的な受診

平成18年度 傷病発生状況（4月～1月）

(1) 医務室処置及び受診状況

	医務室処置			受 診		
	内科的	外科的	合計	内科的	外科的	合計
件 数 (件)	145	126	271	43	36	79
発生率 (%)	0.5	0.4	1.0	0.2	0.1	0.3

※発生率は処置件数を利用児童延べ人数 28,392 人で割り、算出した。

(参考) 平成17年度分（4月～1月）

	医務室処置			受 診		
	内科的	外科的	合計	内科的	外科的	合計
件 数 (件)	155	108	263	68	34	102
発生率 (%)	0.6	0.4	0.9	0.2	0.1	0.4

※発生率は処置件数を利用児童延べ人数 28,140 人で割り、算出した。

(参考) 発生率の12年間の平均（H6～H17）

項 目	内 科	外 科	合 計
医 務 室 処 置	1.0%	0.9%	1.9%
受 診	0.1%	0.1%	0.2%

クラフト（焼き板）安全チェックード

NO	点 検 項 目	当てはまるところに○をしましょう			
		良くてできた	できた	あまりできなかった	できなかった
1	道具の使い方をよく聞いていましたか	4	3	2	1
2	道具を安全に使うよう心がけましたか	4	3	2	1
3	長そで長ズボンなど作業にふさわしい服装でしたか	4	3	2	1
4	軍手をしていましたか	4	3	2	1
5	作業中友達との距離は十分でしたか	4	3	2	1

自分の健康管理をしなくてはなりません。

負傷についても、施設の安全管理と指導者側の的確な安全指導によって最小限にとどめることができます。安全指導の中で上のようなチェックシートを活用して子どもたちに活動中または活動後に自分の行動について振り返らせることもけがの防止に有効であると思われます。また、小さなけがであれば、自分で応急処置を行うことにより生きた知識を学ぶ機会となり、大きなけがとなった場合には、なぜそのようなけがとなったてしまったのか、しっかりと振り返ることがその後の活動や他の教育活動での事故防止にもつながります。

自然学校では、指導者に支援してもらおうとはいえず、様々な既往症を持つ子どもや配慮の必要な子どもも、普段は家族にいらっていることを自分で判断し、支援者に伝えたり、自分でできることは自分ですることになります。このような体験を通して6日間を無事過ごせたことは、子どもたちにとって大きな達成感につながり、今後の成長に大きく影響すると思われます。

自然学校の実施期間中、子どもたちは様々なリスクマネジメントが必要な場面を経験します。友だちと助け合い困難を乗り越えた思い出は子どもたちの心を豊かにし、生きる力となってくれるものと思っています。

は0.1%（28,392人中36名）となりました。ひとりでも多くの子どもたちが、全日程をベストコンディションで安全に過ごすためには、指導者側の指導、支援とともに、子どもたち自身の自己管理意識が必要不可欠となります。日頃の家庭における基本的な生活習慣やしつけ、学校での保健指導をもとに子どもたち一人一人が自分で考え行動し、実践して

一番好きのみなさまへ

キクイタダキ

新年の初売りで、福袋を目当てに行列を作るお客さん。新しく道路が開通する噂を聞きつけ全国各地に出向く「通り初めマニア」。プロ野球日本シリーズの開幕に一番乗りを決め込み、球場の入口で徹夜をする野球ファン。どうやら日本人が一番が好きなようですね。

野鳥の世界に目を移すと、こちらにもいろんな一番があります。一番遠くまで旅をするもの。一番早く飛ぶことができるものですが、分かりやすいのは大きさの一番です。

まず、大きい方ですが、世界一大きい鳥はみなさんよく御存知のダチョウです。その体高は約2 m 50 cm、見上げんばかりの大きさです。日本の野鳥の中では、タンチョウやオオハクチョウが体長約1 m 40 cmと最大です。「優雅で迫力ある、日本一の大きな野鳥を見てみたい」と思う人は多いのではないかと思います。しかし、野生のタンチョウやオオハクチョウは遠く東北や北海道まで出向かなければ、見ることはできません。関西に暮らす私

たちにはどちらかというと馴染みが薄い存在です。

では、日本で最小の野鳥はなんでしょう。スズメ？メジロ？それは、下の写真に10円玉と一緒に登場してもらったキクイタダキです。体長は10円玉約4枚分の9～10 cm、体重は約1枚の5 gしかありません。スズメですら体長14・5 cm、体重20～25 gですから、いかにキクイタダキが小さいかわかります。キクイタダキは日本中部以北で繁殖し、冬に西日本等、暖地に渡り生活します。針葉樹林を好み、枝先や表皮に潜む虫やクモを捕って食べています。

このキクイタダキは、遠くまで出かけなくても、南但馬自然学校のスギ林で毎年姿を見ることがができます。春が近づくと彼らもそろそろ北国への帰り支度を始めます。「かわいい日本一の小さな野鳥を見てみたい」一番好きのみなさま、行列や徹夜は不要です。さあ今のうちですよ。南但馬自然学校のキクイタダキに会いに来ませんか。



ヒノキの幹にとまるキクイタダキ（ほぼ実物大）

兵庫県立南但馬自然学校

増田克也

いんふめーしょん

平成 19 年度自然学校講座・研修会のご案内

■自然体験活動 1 日講座

対象者・定員		公立小・中学校及び特別支援学校教員 40 名 (初任者の校外研修及び 10 年経験者研修として受講できます。)	
期日及び 主な内容	第 1 回	自然・人とふれあい ～実習・ゲーム指導等～	平成 19 年 6 月 26 日(火)
	第 2 回	自然とふれあい ～実習・自然散策等～	平成 19 年 10 月 9 日(火)
	第 3 回	自然物クラフト ～実習・自然物クラフト～	平成 19 年 11 月 27 日(火)

様々な自然体験活動についての技術や指導方法を学び、指導力をアップします。

■自然学校講座 (指導補助員養成コース・指導者スキルアップコース)

期 日	平成 19 年 8 月 25 日(土)～8 月 28 日(火) 3 泊 4 日
対象者・定員	大学生、一般県民、公立学校教員及び南但馬自然学校登録指導補助員、自然学校救急員 30 名
主 な 内 容	講義・実習 「自然学校のねらいと指導補助員の役割」「救急救命講習」「キャンプファイヤーの基礎」「野外炊事の基礎」「ナイトハイク」「自然体感ゲーム」「野外活動におけるリスクマネジメント」「自然物クラフト」「基地づくり」等

《養成コース》
指導補助員等としての基礎的な知識・技術を学びます。
《スキルアップコース》
各自のニーズに応じた講座を選択し、指導力をアップします。

※指導者スキルアップコースについては、1 講座のみの受講もできます。

■自然学校出前講座

期 日	平成 19 年 5 月～平成 20 年 3 月
対 象 校	公立小・中学校及び特別支援学校 (自然学校出前講座申請書で申請してください。)
主 な 内 容	自然学校に関すること ・自然学校の趣旨説明 ・事前相談 ・事前学習 ・事後相談 ・事後学習 ・保護者説明会 プログラムデザインに関すること、体験学習法に関すること 自然とふれあう手立て、人とふれあう手立てに関すること

本校の指導主事が学校や関係機関に出向き、自然学校・体験活動等の支援を行います。

1泊
2日

親子で自然学校

～親子で南但馬を楽しもう～

- 第 1 回 平成 19 年 12 月 15 日(土)～16 日(日)
第 2 回 平成 20 年 1 月 26 日(土)～27 日(日)
第 3 回 平成 20 年 2 月 23 日(土)～24 日(日)

場 所 兵庫県立南但馬自然学校
参加費 食事代等が必要です。
申込み 事前に参加申込書をお送りください。
(参加申込書は各学校に配布します。)
対象者 県内在住の小学生と保護者(原則)
内 容 自然散策、自然物クラフト、餅つき、
星空観察等

遊友体験活動事業

～感動！発見！を南但馬自然学校で～

- 第 1 回 平成 19 年 6 月 9 日(土)「里山観察入門」
第 2 回 平成 19 年 7 月 7 日(土)「水辺の生き物・昆虫観察」
第 3 回 平成 19 年 10 月 13 日(土)「南但馬のきのこ観察」
第 4 回 平成 19 年 11 月 10 日(土)「さつまいも・しいたけ狩り」

場 所 兵庫県立南但馬自然学校
時 間 13:30～16:00
対象者 一般県民(子どもだけの参加は御遠慮ください。)
参加費 無料
申込み 事前に電話連絡してください。

※天候により内容の変更や中止(警報発令時等)する場合があります。
詳細は、本校へお問い合わせください。